

## 式辞

本日ここに第69回広島市立舟入高等学校卒業式を挙行するにあたり、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

先ほど、347名に卒業証書を授与いたしました。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんのこれまでの努力に、あらためて敬意を表します。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。お子様の新たな門出に、お喜びも一入と拝察いたします。皆様のこれまでのご苦勞とご努力に敬意を表する次第でございます。私ども教職員は、舟入高校に居合わせた生徒が互いに切磋琢磨し学習することを通して、互いに高め合えるよう努めてまいりました。しかしながら、至らぬ点もございましたことを、お詫びするとともに、本校の教育にご理解をいただき、一貫してご支援を賜りましたことに、この場をお借りして御礼申し上げます。

広島市立のすべての高等学校では、卒業証書に折り鶴を再生した紙を使用しております。世界の人々の平和への思いや願いを共有し、継承し、さらに郷土広島への愛着や誇りを一層強く持ってほしいという期待からです。本校は原爆によって六七六名の尊い命を失った広島市立第一高等女学校を前身とする学校です。皆さんには、この自覚と、切実な願いを引き継いでいく使命があります。オバマ前米国大統領、ICANのベアトリス・フィン事務局長を始め、広島を訪れた人々は、広島にそれぞれの思いを寄せる人々でありました。しかし、そうでない人々もいます。皆さんは、とりわけ広島を離れる皆さんは、平和や原子爆弾についての様々な意見に晒されることもあるでしょう。そのとき、何と応じるか。皆さんが試されます。

三年前の入学式で私は

「より重大な問いには正解は準備されていません。そもそも正解がないのかもしれませんが。・・・他者や自然、学問との関わりを通じて、すぐには答の出ない問いと格闘し続ける姿勢を大切にしてほしい。」

このように申し上げました。めまぐるしく変化する状況に対応し、課題を解決していく気概を若者に期待する時代になっています。課題の多くは私たち大人が残り、解決できずにいるものです。その解決が難しいのは、そもそも「問いの立て方」が間違っていたのであり、別の「問い方」が求められているのかもしれませんが。皆さんは、高校での学習を通して問題を解くためには、「問い方」が大切であると気づいたはずで、古い人々にできない「問

い方をすること」こそ、新しい人々にふさわしい。だから、新しい君たちに期待するのです。

さて、つい先日、冬季オリンピック・ピョンチャン大会が閉幕しました。選手団の主将は、小平奈緒というスピードスケートの選手でした。彼女は女子1000メートルで惜しくも銀メダルに終わります。直後のインタビューで「ゴールラインの先まで実力を出し切れたと思います」という言い方をします。その後の女子500メートルで遂に金メダルを獲得します。その後「実力」という言葉は聞かれなくなりました。彼女にとって「ゴールラインの先の実力」とは何だったのでしょうか。

アスリートたちが、金メダルという目標に集中して、勝ちにこだわって血のにじむような練習をしてきたことは言うまでもありません。その結果、彼らは最高の技術と体力を手に入れた。ただ、その過程で図らずも、豊かな別の「何か」も手に入れた。彼らの言動はそれを物語っています。一つのことを徹底して追い求めることが、彼らを当初の目的地とは別の豊かな境地に誘う。そうであれば、私たちは勇気づけられます。

何事かを成し遂げようとして「おのれ」は挑戦をはじめます。挑戦とは自分を変えようとする事だ。挫折することもあり、約束を守れないこともある。「他者」に許され、約束をかわし、次の「挑戦」をはじめることができる。「自分」は「他者」に支えられて試行錯誤する。その一方で、約束を交わし許すことで「他者」の挑戦を支える側にもなる。両者はお互いの挑戦を支え合う。そして「おのれ」は「ひと」を尊重することを知り、同時に、かけがえのない「おのれ」に気づく。

このような校訓の解釈をトップアスリートは教えてくれるようです。

きょうは、「おのれ」であると同時に「ひと」でもある君たちを、自信をもって舟入高校から送り出します。卒業生の皆さんが、このすばらしい世界、不安定だが変えることができるこの世界に踏みとどまる覚悟を胸に本校を巣立っていかれることを切に願います。そして、この卒業式が皆さんにとっての、単なるゴールラインとしないことを祈念して、式辞といたします。

平成30年 3月 1日  
広島市立舟入高等学校  
校長 日浦 毅